

# ふるさと、風

第66号 (2011年11月)

風に吹かれて (45)

白井啓治

『一人鳴く鈴虫の淋しく吾も独り』

秋も深まってきて虫の声も毎日その種類も数も少なくなってくる。そんな時、一匹の鈴虫だけの鳴き声を聞くと無性に淋しくなってくる。四年程前であったと思う。ことば座の公演で「里の舞い歌」と題した詩舞の中で『寒蟬』という詩を詠んだことがあったが、ポツンと季節遅れに鳴いている虫の声を聞くとこちらの感傷が疼きはじめる。単純に報われぬ恋の感傷ではなく「死暮れ」を思ってしまう。この寒蟬の詩は切ない恋歌として詠ったものであるが、滅びゆくふる里の暮らしの死暮れの切なさも合わせ詠ったものであった。

寒蟬 (かんせん)

この里山にはもうあなたはいないのでか  
私の言葉があなたの心に届いて  
あなたが私の言葉に伝えて  
あなたの言葉を木霊に返してくださいさるまで  
私はあと幾度声に啼けばいいのですか  
もし

私の声に啼く数の知れたら  
私はこんなに苦しむことはありません

私はもうじゆうぶん過ぎるほど  
あなたに私の声を啼いています  
でも

未だじゆうぶんではないのですね  
私の啼く言葉の力が未だ足りないのですね  
それともこの里山にはもうあなたは  
居ないのでか  
もうすぐ  
もうまもなく

私の声は涙とともに枯れてしまうでしょう  
あなたの谷水を汲むこともなく  
寒蟬はあなたの恋をもとめて  
啼くことだけが定めなのです

この里山にはもうあなたはいないのでか  
私はこのまま恋をもとめて言葉に啼いて  
終わるので  
今夜

秋風が吹いたら  
あなたの谷水を汲むこともなく死暮れて  
そして枯葉に腐して  
土に溶けて  
わたしは無くなってしまふのです

寒蟬はあなたがもういないと自覚しても  
死ぬまで啼きつづけて終えるのです

今月号の原稿として鈴木健兄より印が届いた。その封筒の中にこんなメッセージがあった。

…(勝手なことを書きました。貴意に副い兼ねるようであれば、どうぞ、遠慮なくご返送ください)…。だが小生としては、勝手なことこそ重要で大歓迎と思っている。自己を主張するということは己の勝手を言うことだから、筆者の勝手な言い分のないものこそ編集を預かっている者としては載せることをはばかられる。卑猥な私利私欲的な話しないで限り大歓迎である。

以前も書いたことがあるが、小生は「純粹なる」というと些か大げさではあるが、純粹なる自由主義、民主主義者であると思っている。だから他人の主張はいかなるものであれ尊重するし、その表現を妨害することはない。もし妨害しようとする者が居れば大げさな言い方であるが自分の命を賭しても妨害させないという心積もりは持っている。その代り、その意見に対して賛成しかねれば断固それを主張するし、口汚く罵ることもする。

小生は、こうした考え方はストイックであつても良いと思つている。まあまあとやり過ぎすよりはよほど良いと思う。

今年は大震災に関連して腹の立つことが多い一年であつたが、腹の立つたことには本当に怒つているという事をハッキリ言うべきであろうと思う。大震災に関連しての歴史的人災と言える原発事故に対しても、あの時、私は反対したけれど民主主義の原則である多数決で決まったのだから仕方がない、と多数決に負けた事を免罪符にしている奴らを見てみると腹が立つてくる。こういう連中の裏返し、数は力の似非民主主義を振り回すことになるだと思ふ。「数は力」の歪んだ民主主義の時

代は終わったのかと思っていたら終わるどころか、真実を主張しなければならぬ連中にまで数の力を蔓延らせ、反対論の意義は事件の起こった時の免罪符であるといふとんでもない民主主義を定義し、活用しようとしている。

先日テレビを見ていたら馬鹿な事を言っている政治家がいた。民主主義とは少数意見を聞くことである、と。傍に居たら張り倒してやりたい話である。少数派の意見を聞くのが民主主義ではない。初めに意見の交換があつて、其れでは決がとれなかつたときに、多数決で求めるのである。徒党を組んで初めに結論ありきで、似非民主主義を振り回すから数は力になつてしまふのである。討論で決まりが見えない時に多数決をとる。多数決にしたのだから少数派の人にも決の内容には責任が生ずるのである。だから「あの時反対した」は、免罪符にはならないのだ。多数決の原理殿は、おそらくその真意を短絡的に使われている事に嘆いているだろう。

人は皆、「自由で自在なれ」と小生は思っている。そして自由にも自在にも言い訳の許されない自己責任がある事を切実に思っている。鈴木兄のメッセージから妙な方向に話が来てしまつたが、人はもつと怒ろう、と今改めて思う。

## 日高見国考異聞

「安珍と清姫の物語」

打田昇三

民間の出ながら菅原道真らを重く用いるなど、藤原氏の横望を抑えようと努力したのは第五十九

代の宇多天皇であり、この時代の政治は「寛平の治」と称されている。世に出る機会を失つていた「桓武平氏」を常陸国の高官（介や大掾）に任命してくれたのも、この天皇であるから大掾氏で歴史の里を支えているような石岡市では、宇多天皇を大切にしなければいけないのに、市史などでも触れておらず、真の歴史を粗末にしている。

菅原道真は「遣唐使」の廃止を建言したことで知られるが、廃止の前に中断していた遣唐使を復活させ正使に菅原道真、副使に紀長谷雄を任命する人事が発表されたらしい。結局は現代の政策と同じで「朝令暮改」が行われたようだが「過つて改むるに憚ること勿れ」と言うから恥じることはない。菅原道真は当時、正四位参議であり、紀長谷雄は五位の太政官判官（辨官）であつた。

菅原氏は土師部（はじへ）系の、姓（かばね）と朝臣（あそひ）を貰つた古来の名家であるが、紀氏も、大化の改新以前の蘇我王朝時代から続く豪族であり、子孫には三十六歌仙と称され「百人一首」や「土佐日記」などで知られた歌人の紀貫之（きつらゆき）がいる。従兄弟の紀友則も三十六歌仙に入っているらしいから、政治家よりも文化人の家系なのであろう。

この原稿は「日高見国考」の別稿として書いているが、サブタイトルに挙げたように歌舞伎、浄瑠璃、謡局などで有名な「安珍と清姫」のことを書くのが目的である。それと日高見国と何の関わりがあるのか？…その辺のことを説明しなければならぬが、実は私も、その関わりに辿り着くのに右往左往したので簡単に説明ができない。面倒な…と思われれることにお詫びをして、先ずは民間に流布している「安珍と清姫」の物語の概略を紹

介してから、日高見国に繋げていきたい。

この物語は一般に「道成寺伝説」と呼ばれるもので幾種類かのパターンがある。公演される芸能の形態で中身が違ってくるのは当然であるが基本的な筋は同じであるから、代表的な三つの話を出しておく。その一は「浄瑠璃、義太夫などで一日高川入相花王（ひたかがわいりあいざくら）」として上演されているものの概略である。

前後の事情から推定して時代は宇多天皇よりも前と思われる頃に、皇位の継承を巡って桜木親王

## ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談・勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063

打田 昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

(架空の人物)と藤原忠文とが対立していた。実在の藤原忠文は天慶の乱で平将門を討つるように命じられた将軍で、かなりの高齢の上に京都を出発する際に儀式などで出征が遅れてしまった。一行が関東に入る頃には平貞盛と藤原秀郷との連合軍が将門を討つていたから、忠文は関東まで出征したのに何の恩賞も与えられなかった。

さらに同じ頃に西国の海で藤原純友が暴れた事件の鎮圧も忠文が命じられたのだが、この時にも将軍に任命されるのが遅れて、海賊追討は現地の武将が行った。そういうことで忠文はやる気無くし退職願いを出したのに、大納言の藤原実頼が許さなかった。後期高齢者の忠文は仕事づかれで死亡し、碌な恩賞も与えられなかった。怨霊となつて実頼に祟った。実頼の娘で村上天皇の女御(第二皇后)となつていた述子と、実頼の後継者である敦敏が続いて死んだのである。

藤原忠文は死後に、ようやく中納言になった。皇位継承に関わる人物ではないが、怨霊を鎮めるために物語に登場させたのであろう。浄瑠璃などでは、皇位継承者として忠文のほうが優位であり、競争相手の桜木親王が迫害される。桜木親王は僧の安珍に身を変えて敵の追及を逃れ、実際の場所は何処だか知らないが「真那古」の里に隠れ住むこととし、庄司の館を頼る。庄司は親王を保護してくれたのだが、娘の清姫に感染められる。そのうちに敵は親王の行方を追つて真那古の里も危うくなり、桜木親王は隠れ場所として紀伊の日高にある道成寺を選ぶ。

道成寺では親王を匿ってくれるが、清姫が親王を慕つて真那古の莊を抜け出し、日高川の畔までやつて来る。橋が無いから道成寺へ行くには渡し

舟しかない。清姫が頼んでも渡し守りは「女ごを乗せる訳にはいかない」と拒む。そこでお決まりの筋だが、清姫が大蛇になって川を越す。多分、その後は共通のクライマックスで釣鐘の中に隠れた桜木親王を大蛇が原子力で溶かすのであろう。

二つ目の話は最初から安珍は僧侶である。奥州白河の寺に居り、毎年の熊野権現参詣を實行していた。その時には熊野に近い現在の三重県牟婁(むろ)郡真砂の庄司の家に泊めて貰っていた。庄司の家には娘が居り名を「清姫」と言った。美しい娘ではあったが、未だ幼さが残っていたので安珍は「そなたは美人だから、妻にして奥州へ連れて行こう」と冗談を言っていた。ところが、清姫のほうは、その言葉を真に受けて、或る年のこと、熊野へ行く前に庄司の館へ泊まると、清姫が思い詰めたような顔で「早く奥州へ連れて行って」とせがんだ。僧侶の身で妻帯は出来ない。安珍は冗談を後悔したが、清姫は真剣であった。

安珍は「熊野から下向するまで待て」と騙し、大急ぎで庄司の家を抜け出した。騙されたと思つた清姫は、すさまじい勢いで後を追う。途中の川では首から下が蛇体となり、川に飛び込んで泳ぎ渡つた。安珍は道成寺に入り、事情を話して釣鐘の下に匿つてもらうが、蛇体の清姫は大鐘を七巻きにすると、やはり放射能で鐘を溶かした。言うまでもなく中に居た安珍は綺麗に灰になり、大蛇は悠然と海へ行き入り江に沈んだ。

三番目の話が一番にエロチックであるが、これが古来から道成寺に語り継がれていた説話のようである。やはり熊野に詣でる二人連れの僧が居り、一人は車に紅葉マークを付けていたが、一人は顔形が端正な若者であった。その二と同じく牟婁郡

に辿り着きある屋敷に泊めて貰うこととなつた。ところが、その家の主が若い寡婦で美しかった。

第二話と違つて、こちらの話は僧侶が大人しくしていたのだが若い未亡人が一目惚れした。勿論若い僧にである。最初から心を惹かれ実に丁寧なもてなしをしてくれた。旅の疲れで二人の僧がぐっすり寝込み夜も更けた頃、奉公人の目を盗んで若い僧の寝ている部屋に忍んで来た女主人は、そのまま、寝床に入ってきた。

寝込んで居ても一大事であるから僧は目を覚まし緊急事態に慌てた。しかし対処法を知らない。女主人は慎ましげに、かつ、大胆に言った。

「私は決してこの家に他人を泊めることは致しません、貴方様の美しい姿に心を惹かれたからお泊めしたのです。夫と死別してからは、身を慎み一人暮らしを続けて参りました。しかし、貴方のお姿を見染めて、此の胸が耐えられません。どうか私の夫として共に暮らして頂きたく、今宵、お泊めしたのです。なにとぞ、私の心中を察してください。」

中途半端な総理大臣の国会答弁よりも理路整然とした申し出ではあったが、若い僧は宿願があつて熊野へ行く途中なので、ご要望に応える訳にはゆかなかつた。第二話と同じように「帰りには」と、その場凌ぎの言い訳をして三日後に立ち寄る約束をして熊野へ急いだ。勿論、若い僧侶の貞操は護られたのである。

数日後、女主人は気もそぞろに夫となる僧の到着を待っていた。しかし、夜が更けても僧も象も来なかつた。「あれほど固い約束を交わしたのに：何かあつたのではなからうか？」家を出て熊野の方向に行きかけて、熊野帰りと思われる僧に行き

合い、二人連れのことを尋ねた。「ああ、その方たちは二日ばかり前に国へ帰られた…」

消息を知らされた女主人は見る見る顔色が変わり、屋敷に戻ると寝室に籠って誰も近づけず、程なく死んでしまった。使用人たちは泣き悲しむばかりであったが、屋敷の周りを妖しい気が覆い、異様な雰囲気漂い、突如として巨大な蛇が屋敷を抜け出して熊野の方角に走り出した。

一方、女主人を騙した僧は、故郷への道を急いでいたが、途中で怪しい蛇の話を目にし、危険を感じて道成寺に逃げ込んだ。事情を聞いた道成寺の僧たちは、あれこれ考えたが相手が大蛇であるから、最適な隠れ場所として鐘櫓（釣鐘）を提供してくれた。若い僧は鐘櫓内に隠されクレールンで降ろされた釣鐘の中で息をひそめていた。

他の僧たちが避難を終えた頃、一匹の大蛇が切り傷で血だらけになりながら、道成寺に突っ込んで来た。閉じられた門を飛び越えて大蛇は本堂を探り、そこから鐘櫓を見つけて「これだ！」とばかり扉を尾で叩き、壊してしまった。置かれた鐘に巻付いた大蛇は幾重にも巻きつき、測定しなければ分からない怪しいエネルギーを釣鐘内部に吹き付けた。これにより鐘は赤くなった。

大蛇が去った後、道成寺の僧たちは、釣鐘を持ち上げてみたが、僅かな灰が残るのみで骨さえも留めずに若い僧は消えていた。この奇怪な話の人々の記憶から忘れ去られた頃に、道成寺の高僧が夢を見た。またしても大きな蛇が現れ「自分は匿われた僧である」と名乗り、今は毒蛇となった女性の虜（とりこ）となって苦しい日々を送っていると、訴えた。

大蛇になった若い僧の願いを聞いた高僧は、法

華経を書き写して大蛇夫婦を供養した。程なく高僧の夢に若い男女が現れ、法華経の功德で生まれ変わって仏になれたことを告げた。人々は改めて法華経に帰依した：というオチである。この他に違うバージョンが有るかも知れないが人間の煩惱と大蛇と鐘というモチーフは変わらないと思う。

さて、ここで怪しい説話の舞台とされた「道成寺」のことを説明すると、この寺は千手院と号し大寶元年（七〇二）に文武天皇の勅願により紀道成（きのみちなり）が創建したと伝えられる。文武天皇は六歳の聖武天皇を残して三十一歳の若さで死亡した。道成の名をとって道成寺は分かり易い名である。開基は高僧の義淵で、文武天皇の為に紀道成が資金を出し、義淵に来て貰った寺なのである。義淵は幼い頃から天智天皇が目を掛けて育てた僧で、後に元興寺に移り、奈良仏教の基礎をつくった。紀道成が朝廷内でどういう地位に居たかは知らないが、藤原氏台頭前の名族であるから天皇の側近に仕えていたのであろう。

道成寺はかつての紀伊国、和歌山県日高郡川辺町にあった。ここは日高町に改称し、またどこかと合併したかもしれない。寺内十六坊と言う大寺院であったが、戦国時代に兵火に罹り、それを水戸から和歌山に移った徳川頼宣が復興して寺領九十一石を与えて保護した。それ以前にも道成寺は文武天皇夫人、つまり聖武天皇生母の藤原宮子ゆかりの寺で「女人開運」「夫婦和合」の御利益があるとと言われるけれども、蛇の執念を思うと、男性は行きたくない気もする。

道成寺の前を流れる日高川は奈良県側の紀伊山地に源を発して御坊市付近の太平洋に入る。川辺町が一時的だが日高町を名乗ったのは「日高川」

に因むのであろう。上流に龍神温泉があり川は一五kmの殆どを蛇行しているから、大蛇の伝説が生じる要素はある。常陸国で言えば水戸（友部）と石岡に残る蛇神伝説のようなものである。

この国は紀伊の国（紀の国）である。元は「木の国」と呼んだらしいが、常陸国と違って風土記が全滅しているので全く手がかりが無い。紀氏が其処に寺院を建立したのは偶然では無いと思うが紀の国は木の国であり、森林地帯を想定する。

ところが、常陸国風土記の「筑波の郡」には冒頭に「：筑波の郡は、古、紀の国と謂ひき。美麻貴の天皇（崇神天皇）の世に采女臣（うねめのおみ）の友属（一族）筑篁の命（つくばのみこと）を、紀の国の国造に遣はしし時、筑篁の命の曰ひしく、「身が名をば国に著けて、後の世に流伝へまく（つたへまく）欲ふ」と曰ひて、すなわち本の號を改め、更に筑波と稱ふといへり」とある。

樹木の生い茂っている地域を、やたらと「紀の国」と称したとも思えないし分からない。日高見国考の本文で紹介した「常陸国風土記の史的概観」には「朝廷に服しない先住民の居る区域を“紀”で示した」可能性を示唆されたが、常陸国は該当しても、真先に平定された紀の国には合わないように思う。紀氏の地だから紀州なのか、それとも和歌山県民には日本先住民族のような彫りの深いアイヌ人的な容貌も見られると言うから、日高見国に共通する蝦夷の人々が、大和朝廷の侵略を逃れて現地に残っていたことも想像できる。常陸国の古代と何か関連がありそうだが…。

苦し紛れで神話に頼れば、神武天皇となる神倭伊波禮毘古命（かむやまといわれびこのみこと）が兄の五瀬命と共に軍勢を率いて西方から近畿地方に侵入

した際に紀の国・和歌山県南部、熊野地方で大熊に身を変えた現地の神（地方のボス）に攻撃されて部隊全滅の危機に直面した。これを知った天照大神が友人の建甕槌命に救援を頼み、建甕槌命はその仕事を地元・下請業者の高倉下に回した。高倉下は名前のとおり倉の中で昼寝をしていたが、その枕許に建甕槌命の剣が落ちてきたので、それを担いで紀州熊野の山中へ行ってみると神武軍全員が気絶していたのである。

高倉下は預かってきた建甕槌命の剣の威力で神武天皇以下を回復させた。お蔭で大和王朝が近畿地方に進出できたのである。科学的根拠のない話であるが、これを近代の歴史から推定すれば次のようになる。

新興勢力の神武部隊が新たな地盤を求めて近畿地方を目指し、熊野に進出した際に蝦夷系か、出雲系かの現地勢力に抵抗されて全滅の危機に遭遇した。救援要請を受けた女性指導者の天照は出雲系にも顔の効く有力者である建甕槌に解決を依頼した。建甕槌は地元熊野の勢力である高倉下に命じて事態を平和的に処理するようにした。古事記には順序が後先に記載されているが、この時の建甕槌の調停により日本国が出雲王朝から新興勢力の大和王朝に移管されることになった。

建甕槌命は、大和朝廷が日本に君臨することが出来るようになったことの最大功労者であるから日高見国が常陸国に置かれた際に、太陽が昇る東海の浜辺に祀られたのである。それを祀った者が古代の東海道を進んで来て筑波山麓に到達した際に紀の国・熊野山中を思い出す樹林を見て、取り敢えず「紀の国」と命名することはある。

神話の世界では建甕槌命と経津主神（香取神）と

が、出雲系武将たちの中で国譲りに納得しない者たちを折伏鎮定した後、常陸国信太郷に来て身に付けていた鏡兜、楯、剣、杖、玉などを其の地に置き、報告のため白雲に乗りて天に還り…とある。（日本神代史）信太郷つまり日高見国は日本国に於ける国造り神話でも原点になる。

紀の国の関わり以外に、道成寺を建てた名族・紀氏の発祥には、何の因果か日高見国を発見して「これを征服すべし」と余計なことを景行天皇に進言した武内宿禰が関係している。景行天皇の命令で紀伊の国の祭祀を執行していた屋主忍男武雄心命（やぬしおしおたけおこころのみこと）という面倒な名前の人物が居り、その妻となったのが紀氏の遠祖・菟道彦（うじひこ）の娘の影姫である。二人の間に生まれたのが武内宿禰であるから紀の国を故郷とする宿禰が諸国を巡り、筑波山に到達したときに深い森に紀の国を思い出して同じ名を付けたかも知れない。

その紀氏であるが冒頭に述べた何人か他にも古代に朝鮮遠征の將軍になったりした人物が居たけれども、概して藤原氏の隆盛に伴って中下級官僚に終わったようである。そして菅原道真と共に遣唐使（副使）に充てられながら実現しなかった紀長谷雄から五代目の維致（これむね）又は維頼という人物が、平安時代の末期に河内の荘司に補されて着任している。河内郡は信太郡と共に古代の筑波郡（筑波国）に含まれていた区域である。やがて紀氏は信太荘の荘司になった。

鎌倉時代に入ると、常陸国では桓武平氏系の大豪族・多気の大掾氏が八田氏に滅ぼされる。八田氏は源頼朝の側近として北条氏とも接近して常陸国で勢力を伸ばす。信太荘の紀氏も伝八郎貞頼の

代には八田氏に仕えることとなった。貞頼の子の頼康は、荘司太郎と言う歌手の様な名前である。其の子・頼高（右衛門尉）―頼房（兵衛尉）―忠貞（左衛門尉）―小田氏の執事…古の日高見国である信太に定着した紀氏一族は戦国末期の小田氏滅亡まで仕え土浦近辺の城主も居たようである。当然だが、古代以来の信太庄は中世から小田氏の支配になっていた。回りくどい言い方をしたが、古代の名族で紀伊国に「日高」の名を残す地方に、文武天皇（国分寺を建立させた聖武天皇の父親）の為に道成寺を建立した紀一族が実は本来の日高見国である常陸国信太地方の荘司であったという「安珍と清姫」の因果話には及ばないが、何となく因縁を感じる物語を紹介した。なお、道成寺は創建当時、興福寺を本山とする法相宗であったが途中から天台宗に替わっている。その所為か、信太地方には天台宗の寺院が多いように思える。

## 女性と戦争

鈴木 健

「太平の眠りを覚ます上喜撰 たった四杯で夜もねられず」、突如このような狂歌が幕府の膝元の江戸でひろまった。上喜撰は高級茶の一種、四杯は茶碗四杯。蒸気船四杯（船を数える単位）をかけている。アメリカの軍艦4隻が浦賀に現れたのは、1853年7月8日のことであった。見たこともない黒船の煙突からは黒く太い煙が立ち上っている。話を聞いて江戸中大騒ぎ。国を閉ざし太平の眠りをむさぼっていた幕府は腰を抜かして国を開いた。幕府にかわり天皇が統治者となった明治で

は逆に、開いた門戸から日本の軍隊が中国や朝鮮に進出しはじめた。福沢諭吉もそうであったが、自国の利益のために他国を犠牲にするのは当然とする国家エゴイズム、侵略主義が蔓延した。一方、ヒューマニズム、自由民権思想に目覚める人も増えてきた。日清戦争（1894～95）や日露戦争（1904～05）のころはまだ少し自由があった。啄木は、「人がみな 同じ方向に向いて行く。それを横より見ているところ」と歌ったが、昭和に至っては、そのような傍観者の存在はゆるぎされない。国民は束になって同じ方向に向かって歩かされた。1904年9月の『明星』に与謝野晶子は「君死にたまふことなかれ」を「旅順包囲軍の中に在る弟を嘆きて」という傍題をつけて発表した。

#### 君死にたまふことなかれ

ああおとうとよ 君を泣く  
君死にたまふことなかれ  
末に生まれし君なれば  
親のなさはまさりしも  
親は刃（やいば）をにぎらせて  
人を殺せとをしへしや  
人を殺して死ねよとて  
二十四までをそだてしや  
堺の街のあきびとの  
旧家をほこるあるじにて  
親の名を継ぐ君なれば  
君しにたまふことなかれ  
旅順の城はほろぶとも  
ほろびずとても 何事ぞ

君は知らじな あきびとの  
家のおきてに無かりけり

君死にたまふことなかれ  
すめらみこと（天皇）は戦ひに  
おほみづからは出でまさね  
かたみに人の血をながし  
獣（けもの）の道に死ねよとは  
死ぬるを人のほまれとは  
大みこゝろの深ければ  
もとよりいかで思（おぼ）されむ

ああおとうとよ 戦ひに  
君死にたまふことなかれ  
すぎにし秋を父君に  
おくれたまへる母ぎみは  
なげきの中にいたましく  
わが子を召され 家を守（も）り  
安しと聞ける大御代（おほみよ）も  
母のしら髪（が）はまさりぬる

暖簾（のれん）のかげに伏して泣く  
「あえかにわかき新妻を  
君わするるや 思へるや  
十月（とつき）も添はでわかれたる  
少女（をとめ）もこのころを思ひみよ  
この世ひとりの君ならで  
ああまた誰をたのむべき  
君死にたまふことなかれ

わずかに残されていた自由の空気を吸いながらの絶唱である。晶子の心境に共鳴した吉田隆子（久

保栄夫人）が太平洋戦争の過酷な環境の下で曲を作ったが、さすがの晶子も、その後は権力に取り込まれ、息子が海軍大尉となって戦争に行く時には、「水軍の大尉となりて我が四郎（本名豊彦）み軍（い）くきにゆく たけく戦へ」と力なく歌っている。

「君死にたまふことなかれ」という「この真情吐露の詩は、女性感情の途な噴出であったが、軍国主義の燃え立っていた日本の社会では、結果として大胆不敵な反戦思想の表現と見られた。大町桂月は『太陽』の十月号で、この詩を『国家観念を藐視（ばくし）軽く見るにしたる危険なる思想の発現なり』と論じた。特にその第三聯（連）の意味するところは、『天皇自らは、危き戦場には、臨み給はずして、宮中に安座しながら、死ぬるが名誉なりとおだてて、人の子を駆り、人の血を流さしめ、獣の道に陥らしめ給ふ無慈悲なる御心根かな』と歌ったものであるとして、この詩を反戦的、皇室侮辱的立場のものと断じた。」（伊藤整）

しかし、桂月の尻馬に乗ってこれを罵るものはなかったという。晶子自身も『明星』十一月号に、「少女と申す者誰も戦争ざらひに候。…桂月様たいそう危険なる思想と仰せられ候へど、当節のやうに死ねよ死ねよと申し候こと、又なにごとにも忠君愛国などの文字や、畏（おそれ）おほき教育御勅語などを引きて論ずることの流行は、この方却つて危険と申すものに候はずや。…見送の親兄弟や友達親類が、行く子の手を握り候て、口々に『無事で帰れ、気をつけよ』と申し、大（おほ）く『万歳』とも申し候こと、…私のつたなき歌の『君死に給ふことなかれ』と申すことにて候はずや。」などと反論した。また、大塚楠緒子（くすおこ）は、桂月が書いたその『太陽』の翌年一月号に次の詩を載

せて晶子を援護した。

お百度詣まうで

一足踏みて夫(つま)思ひふたあし国を思へども  
三足ふたたび夫おもふ 女心に咎ありや

朝日に匂ふ日の本の 国は世界にただ一つ  
妻と呼ばれて契りてし 人は此の世に只ひとり

かくて御国と我夫と いづれ重しとはれなば  
ただ答へずに泣かんのみ お百度詣あゝ咎あり  
や

二人の女性の訴えは共感を呼び、「君死にたまふことなかれ」とか「ひと足踏みてつま思ひ」とかと口ずさむ人も多かったという。国家権力によって無慈悲に引き立てられていった男たちを引き戻すには、「死にたまふことなかれ」と祈るか、「お百度詣で」をするかであったが、日露戦争中にまじないの方法が加わった。「千人針」である。

日中戦争時代にもそれは引き継がれ、愛国婦人会などのたすきをかけた婦人が街頭で「お願いします」と呼びかけていた。それは、「虎は千里を往つて千里を帰る」ということから、手拭に赤い点でかたどりし、赤い糸で千人の女性に縫い上げてもらうと虎の絵ができればがるものであった。無事に帰るようというまじないで、戦場に赴く男に持たせるもの。死線を越えるために5銭玉や、苦戦を超えるというので10銭玉を縫い付けて縁起をかつぐこともおこなわれた。つい先日某紙の歌壇には「色褪せし千人針を虫干しす 街頭に立ちし母の顔浮く」という投稿が載っていた。戦

後65年、千人針を命の恩人として大切にしている家族がある。

日清・日露を通じて多くの軍歌が作られたが、いずれも戦士や国民の士気を鼓舞するものが多く、なかには女性の徳を讃える歌もあった。「味方の兵の上のみか 言も通わぬあだまでもいとねんごころに看護する 心の色は赤十字」(「婦人従軍歌」日清戦争時。当時は、敵兵にも看護の手をのべるヒューマニズムが生きていた。

とりわけ印象的なのは、戦場でのぎりぎりの苦勞と苦悩を歌にして赤裸々に訴えた「雪の進軍」(陸軍軍楽隊長永井建子作詞作曲・日清戦争時)と「戦友」(真下飛泉作詞、三善和気作曲・日露戦争時)である。ともに、日中戦争になってからも戦地で盛んに歌われたが、太平洋戦争になると、歌うことが禁止された。また、「天皇陛下万歳」とか、「我が大君に召されたる」や「大君の御ために」などのフレーズは明治にはなく、昭和の軍歌で姿を見せるようになる。

そして、その昭和。

○ わが大君に召されたる、命栄えある朝ぼらけ、  
讃えて送る一億の、歓呼は高く天をつく、いざ征けつわもの、日本男児。

○ 父祖の血潮に色映ゆる、国の誉の日の丸を、  
世紀の空に燦然と、揚げて築けや新アジア、  
いざ征けつわもの、日本男児。(出征兵士を送る歌)

の激励を受けて、「イッテマイリマス」と元気に挨拶したが、やがて、「貴様帰ってくるつもりか、イキマスと言え」ということになり、兵隊に行く若者は死を覚悟させられた。

○ あゝあの顔であの声で、手柄たのむと妻や子が、ちぎれるほどに振った旗、遠い雲間にまた浮ぶ。

○ あゝ堂々の輸送船、さらば祖国よ栄えあれ、遙かに拝む宮城の、空に誓ったこの決意。

○ あゝ大君の御為に、死ぬは兵士の本分と

笑った戦友の戦帽に、残る恨みの弾丸の跡。

○ あゝ傷ついたこの馬と、飲まず食わずの日も三日、捧げたいのちこれまでと、月の光で走り書。(暁に祈る)

○ 白地に丸のくつきりと、正しく強く美しい、何のしるしの紅か、燃ゆる正義をかたどった、げにこの御旗の下にして、男児は笑みて死ぬるなり、むかしも今も後の世も。(日章旗の下に)

そして、全曲が死一色で埋め尽くされていたのが、戦争中を通じて一番多く歌われたこの歌だ。

#### 露宮の歌

一 勝つて来るぞと勇ましく、誓って故郷(くに)を出たからは、手柄たてずに死なりようか、進軍ラッパ聴くたびに、臉に浮ぶ旗の波。

二 土も草木も火と燃ゆる、果てなき荒野踏み分けて、進む日の丸鉄兜、馬のたてがみ撫でながら、明日の命を誰が知る。

三 弾丸もタンクも銃剣も、しばし露宮の草枕、夢に出てきた父上に、死んで帰れと励まされ、さめて睨むは敵の空。

四 思えば今日のたたかいに、朱にそまっつてにっこりと、笑って死んだ戦友が、天皇陛下万歳と、残した声が忘らりよか。

五 戦争(イクサ)する身はかねてから、捨てる覚



悟でいるものを、鳴いてくれるな草の虫、東洋平和のためならば、なんの命が惜しかろう。

女性たちも覚悟を決めるほかはない。

一抱いた坊やのちひさい手に、手を持ち添へて出征のあなたに振った紙の旗、その旗かげで日本の、妻の覚悟はできました。

二今日は母校の講堂で、敵地へ送る日の丸や、真心こめた慰問品、その針針を日本の、妻の誠で縫いました。

三ひばりの声は空高く、我が家の畑は金色に、みごと実った麦の秋、その穂を撫でて日本の、妻の力を知りました。

四進めば屠る敵の陣、みいつに進む皇軍の、銃後を守る私たち、その栄光に日本の婦人は強く立ちました。(婦人愛国歌―抱いた坊やのこ)

やがて、戦死の公報がつぎつぎに母や妻の手に届くことになるが、最愛の人を失っても人の前ではそれを悲しむことはできなかった。

○ 東洋平和のためならば、なんで泣きましよ国のため、散ったあなたの形見の坊や、きつと立派に育てます。(皇國の母)

○ 友よわが子よありがたう、誉の傷のものがたり、何度聞いても目がうるむ、あの日の戦に散った子も、今日は九段の櫻花、よくこそ咲いてくださった。(父よあなたは強かった)

○ 空を衝くよな大鳥居、こんな立派なお社に神と祀られもつたいなさよ、母は泣けます嬉しさに。

○ 鶯が鷹の子産んだよ、今じや果報が身に余る、金鵝勲章が見せたいばかり、逢いに来たぞや九段坂。(九段の母)

夫や息子の死を、アリガトウ、ヨクコソ、ウレシイと迎えなければならなかった。靖國の神と祀られ、天皇に感謝されることで、気が済む妻もあり、もつたいたいと感激する母もあった。近所の人のあいさつも、「このたびは名譽の戦死をとげられたそう、オメデトウございませう。」が決まり言葉。うっかり、「働き手をなくしてお気の毒なことを」とか「若いのかわいそうなことを」などと口にする、それでも日本人か」とか「非国民」、果ては「国賊」という言葉がどこからともなく飛んでくるような雰囲気だった。

最後に、美談というか妖艶壯絶な逸話をご披露したい。「君が代」の歌詞を白字の流麗な草書体でありばめ、合間に一六弁の菊の紋をあしらった赤い襦袢が、戦後姿を露わにした。持ち主だったのは芸者か、巫女か、生地から昭和の戦争中のものとされている。「明日はお参りか」という時のものかと思われるが、どのようなお方が、どのような考えで作られ、どのような気持ちでまとったのである。しかも、官憲の目が光り、密告が横行を極めていた時代のなかである。

### ノーベル賞ごぼれ話(1)

菅原茂美

今年もノーベル賞シーズンがやってきた。日本には有力な受賞候補者が多数おられる。特に生

理・医学賞では、京都大学山中伸弥教授の生命のプログラムを巻き戻す「iPS細胞」(人工多能性細胞・新型万能細胞ともいう)の研究が際立ち、人類に大きな貢献をもたらすことは確実。

山中教授は絶対に今年こそと固く信じていた。その発表ニュースを聞いてから、お祝いの言葉を綴り、分かりやすく解説を試み、「風」11月号の原稿を書こうと悠調に構えていた。

それが残念なことに、今年日本人では、どの部門にも該当者がいなかった。日本は、自然科学部門は特に優れ、物理学部門では素粒子「ニュートリノ」の研究では、世界のトップ業績を上げているし、化学部門では、青色発光ダイオード(LED)・リチウムイオン電池・光触媒など、世界を圧倒的にリードしている。にもかかわらず今年は何一つ受賞の朗報は得られなかった。

さて、毎年ノーベル賞受賞者発表で、私が特に関心を持つのは、(私の職業にも関係するので)生理・医学賞部門である。日本人ではこれまで、利根川進教授(1987年)ただ一人である。

ちなみに日本の受賞者数は、これまで物理学部門・化学部門はそれぞれ7名ずつであり、その他は文学賞2名、平和賞1名、合計18名である。

### 【日本人ノーベル賞受賞者一覧】

1949年	湯川秀樹	物理学
65年	朝永振一郎	物理学
68年	川端康成	文学
73年	江崎玲於奈	物理学
74年	佐藤栄作	平和
81年	福井謙一	化学
87年	利根川進	生理学・医学



9 年	大江健三郎	文学
2000 年	白河秀樹	化学
01 年	野依良治	化学
02 年	小柴昌俊	物理学
02 年	田中耕一	化学
08 年	小林誠	物理学
08 年	益川敏英	物理学
08 年	南部陽一郎	物理学
08 年	下村修	化学
10 年	鈴木章	化学
10 年	根岸英一	化学

さて2011年の生理学・医学賞受賞者は次に掲げる3名で、キーワードは「樹状細胞」。

①ブルース・ボイトラー・米スクリプス研究所 教授(53)

②ジュール・ホフマン・元フランス国立科学アカデミー議長(70)

③ラルフ・スタインマン・米ロックフェラー大 学教授(68)。発表直前9月30日死去。

人間や動物の「免疫」には、生まれながら持っている「自然免疫」と、自らが病原体などに接触して得た「獲得免疫」の2種類があるが、生まれながらに持っている自然免疫の主役をなすのが「樹状細胞」(白血球の一種)で、これをスタインマン教授が1973年に発見した。他の二人は、樹状細胞の機能を解明した。

細菌やウイルスなどが体内に侵入してくると、樹状細胞が遊走し、侵入現場に駆けつけ、まず敵を取り込む。そして仲間を呼び寄せ、病原体を迎撃する。更に、T細胞というリンパ球に「敵」の情報を伝え、T細胞はB細胞というやはりリンパ

球に敵を抑えつける「抗体」というタンパク質を生産するように指示し、この抗体が病原体と結びつき、悪さができないように働く。B細胞は、後天的に遭遇した敵の情報を長く記憶し、次に敵が再侵入してきても直ちに無毒化する。これを、「獲得免疫」という。ワクチンとは、細菌やウイルスの持つ情報物質(タンパク質)を前もって注射しておけば、B細胞がしっかり記憶しておき、もし、後日、本物の敵が侵入してきても、間髪を入れず、敵を無毒化するシステムである。

【関連余談】近親交配がなぜいけないか？

それは、同族が似たような遺伝子構成ゆえ、うまく環境に対応でき、適者生存ということなら大変結構な事。家畜改良の一部の手法として、わざわざ近親交配で、ある形質を強化する事がある。

しかし何かの思わしくない環境に遭遇した場合、遺伝子構成が皆同じようでは、抵抗がでなくなると、その種族は一気に滅亡へと向かう。

自然界では、本能的に、同じ遺伝子が重複しないよう、メスは一発情期に、多くのオスと交わり、遺伝子の多様性を確保する。ある学者の調査では、ツバメの6羽の子供のDNAを調べたところ、つがいの夫の子は2羽のみであった。あとの4羽は夫以外の4羽のオスの子であった。夫に巣を守らせ、妻は華麗に宙を舞う。その間、種の存続を考えてか無意識か知らないが、多くのオスと交わる。これぞメスのしたたかさで、何千kmもの渡りの試練に、新米旅行者は何割生き残れるか。メスは、そこまで計算に入れた浮気なかもしれない。

更に格調高い研究報告を紹介する。文学者は、動物の行動を、科学的に観察というより、空想で自然現象を美化して讚える。「おしどり夫婦」は、

いつも仲良く二人連れ…と称賛するが、実はオシドリのは、チャンスがあれば、なんとか夫の目を盗み、他のオスと交わるため、逃げ出そうとする。そこでオスは、妻に逃げ出されてたまるかとしつこくつきまとい、警戒のため、側を離れないのだという。傍目には幸せそうな二人連れも、真実は嫉妬の修羅場なのかも…。オシドリやクジャクなど、メスに対し、オスの着物が圧倒的に華やかな鳥類ほど、そのメスは気移りし、夫以外のオスを求める傾向が強いと言われる。

このように遺伝子の多様性があれば、誰かが倒れても、他の誰かが生き延びることができる。変化する環境に適応できた子孫は繁栄し、確実に子孫を残せる。「雑種強勢」の論拠である。

【日本では昔「殿」だけではなく、庶民も何人かの側室を持つ者がいた。そこで明治新政府は、何を血迷うたか知らないが、夫婦は「一夫一婦制」と法で定めた。自然に逆らう「愚法」である。】

今、世界の動物学会は、オーストラリアのタスマニアデビルが、フレシネ国立公園内で「顔面腫瘍性疾患」のため95%も死亡し、滅亡の危機に瀕していることが話題になっている。即ち「がん」が伝染して種が滅びそうになっている。理由はデビルというフクロネコ科の動物は、非常に気性が荒く咬み合ってケンカをする為、自分の顔にできがが細胞が相手の傷口に移り定着し、半年ぐらいで、がんのため死亡する。本来外部から侵入した細胞などは、「敵」とみなされ、樹状細胞など免疫系により排除されるものである。しかし過去、タスマニアで何らかの伝染病が流行し、デビルの殆どが死滅した時、わずかに生き残った群は結局、近親交配をし、MHC(主要組織適合遺伝子複合

体)が、群れ全体で殆ど同じで、他の個体の細胞と自己の細胞との区別ができなくなつた。がん細胞という他の個体由来の異常細胞さえ、免疫機能が排除できなくなる不幸を招いたと考えられる。

若い娘が、本能的に、自分のMHCと異なる男性の汗臭い下着を、大変心地よく感じるといわれる。即ち本能的に自分とは異なる遺伝子を求めている訳だ。ところが父や兄など、MHCが自分とあまり変わらない人に対しては、むしろ嫌悪感を抱くといわれるが、これこそ、生き物が自然界で生き抜く、神が授けた智慧なのである。

\* \* \* \* \*

さて話を戻し、ここで、ノーベルの生涯について触れてみたい。今年はノーベル賞創設110周年にあたるので、上野の国立科学博物館で、記念展覧会が開かれている(以下新聞報道から抜粋)。

アルフレッド・ノーベルと言えばダイナマイトの発明者で、巨大な利益を元にノーベル賞を創設した実業家と一般には受け止められている。だが、素顔のノーベルは、意外と純朴な人物だったという。子供のころは病弱で、文学を志していた。スウェーデンのストックホルム生まれ(1833〜96)。生活は苦しく、父親はノーベルが4歳の時、出稼ぎでロシアに転出。母は野菜売りなどで3人の子を育てる。ノーベルが9歳の時、軍需工場を営む發明家の父の事業成功で、家族はロシアに移住。それが爆薬との縁の始まりであったという。

17歳の時、欧米の優れた技術者のもとに修行の旅に出されたが、これは父親がノーベルに文学への夢を諦めさせ、技術者として生きるための選択であったという。しかしその後、事業家で多忙なノーベルは、文学への思いは冷めず、晩年には

「メネシス」という戯曲も執筆。こうした活動が文学賞創設の源流にあつたといわれる。

青年ノーベルは、トンネルや運河の土木工事に使われる爆薬を、不安定で爆発しやすいニトログリセリンに改良を加え、扱いやすい「ダイナマイト」を發明(1866年)。それが世界中に流通し巨万の富をもたらした。しかし高性能爆薬は、やがて戦争の道具と化していったことに酷く心を痛め、ノーベル平和賞の創設へと展開する。

【ちよつと寄り道・無駄話。爆薬と言え、江戸幕府お抱えの忍者も爆薬を多用した。今の神宮球場あたりが彼等の巢窟であつたという。特に甲賀忍者の頭領高嶺家の屋敷跡は、ヤクルト球団のクラブハウスに化けている。ある歴史研究家は、高嶺家の末裔を甲賀の山中に探しあて、直系子孫である現業剤師に、忍法に関する古文書を見せてもらった。「毒薬之方」延宝9年(1681年)とある極秘文書には、暗号多様で毒薬作りの処方が載っていた。しかも、毒薬製造者の安全防護のノウハウまでキチンと書かれていたという。研究家は、幕府の陰謀史観を唱えるつもりはないが、と断り、幕府に反目する大名などが次々タイミングよろしく死亡していく。忍者化学者の技術水準の高さに『さもあんなん』と驚かされたという。

その際立った一例は、「毒薬鉄砲」の弾丸の秘密製法。毒性昆虫「唐ハンミョウ」の乾燥粉末百目(375g)、フグの肝乾燥粉末五十目(188g)など12種の毒薬を竹の筒(長さ・廻りに4寸)に詰め、「棒火矢」という爆薬を使った忍者ロケットに搭載して、敵陣に打ち込む。ロケットの射程距離は三十町(約3km)で、「一放にて数百人討殺す」とある。この歴史研究家の偉いところは、処

方箋の片隅にメモ書きしてあつた暗号を解説成功したこと。例えば「大・工・上・吉・仕」は「二・三・四・五」を表わしていたという。】

\* \* \* \* \*

さて本論。平和賞だけが母国スウェーデンではなく、ノルウエーで授与されるのは、ノーベル賞創設の遺言当時、ノルウエーはスウェーデンの支配下にあり、平和を願うノーベルの遺志により、独立した後もノルウエーで選挙・授与されることになったのだという。

それにしても、2010年の平和賞が中国の民主活動家「劉曉波」氏に決定するや、中国政府は、服役中の犯罪者に受賞は許されない。内政干渉だと反発。家族の受賞出席も許さなかった。代わりに「孔子賞」を設けたが、これは、孔子の尊厳を害するもの…との国内批判もあり、11年度からは廃止したとのこと。世界第2位の経済大国に成長したのなら、人権尊重等、国家の品格も並行して向上してもらいたいもの。そして、東日本大震災を『いい気味だ!』とブログが国中を駆け巡っているというが、いい加減にしてほしい。

【しかし、かの国のみを批判するわけにもいかぬ。それは、日本国内同士でも、放射能汚染を懸念し、送り火に岩手の薪を拒否したり、福島県で作った花火を上げさせないとか、郡山で作った鉄の橋げたを使わぬとか…浮世の風の冷たさに、聞いただけでもへドが出る。風評被害など、特に西風の冷たさよ! 更に被災地を訪れた復興大臣の暴言。失言というより欠格人物だ。日本人同士でも、こゝろなだから、他国の非情さを批判するわけにもいかぬ。そして、地震・津波被害の極限状態でも、商店での略奪や暴動が起きなかつたと、公徳心の

強さを世界から高く称賛された同じ日本人なのに、と情けなくなる。今更、土下座して謝っても、もう遅い。心に受けた傷は、治りやしない。】

また1975年のソ連のアンドレイ・サハロフ氏、91年ミャンマーの民主化運動指導者アウンサン・スーチー氏の受賞時にも、出身国は激しく抵抗した経緯がある。そして、わが国唯一の平和賞受賞(74年)の佐藤栄作元首相は、「非核3原則」の提唱が受賞理由であった。

\* \* \* \* \*

話は変わり、「イグ・ノーベル賞」。これはノーベル賞のパロディー版。NOBELにIgnoble(品がない、不名誉な)をかけて造られた造語。

1991年、ハーバード大学系科学ユーモア雑誌「奇抜な研究年報」が企画運営し、毎年10月、同大学で授与式が行われる。賞金や交通費はなく、趣向を凝らしたトロフィーと賞状が授与される。

審査員は、ノーベル賞受賞者なども含む同大学教授ら。受賞部門はノーベル賞の6部門のほか、年により、心理学・言語学・栄養学・航空学なども授与されることがある。受賞対象は、ユーモアや意外性のある独創的研究となっており、笑いと称賛の他に、皮肉や風刺も込められる。

我が国の受賞者を見ると、実にユニークでユーモア溢れる研究が選ばれている。総数は11年間で計14の個人・団体が受賞している。

### 【イグ・ノーベル賞の主な日本人受賞者名】

1992年 神田不二宏(資生堂) 医学賞

足の臭いの原因となる化学物質を解明

1997年 真板亜紀(バンダイ) 横井昭裕(ウ

イズ) 経済学賞 「タマゴッチ」を開発

1999年 牧野武(探偵業) 化学賞

夫の下着にふきつけると精液の痕跡が分かる「浮気検出スプレー」を開発

2002年 佐藤慶太(タカラ) 他 平和賞

犬の鳴き声を、人間の言葉に自動翻訳する「バウリンガル」を開発

2004年 井上大祐(イノウエ) 平和賞

カラオケを開発

2008年 中垣俊之(北大) 認知科学賞

脳や神経を持たない真性粘菌が迷路の最短ル

ートを見つける能力があることを発見した。

2011年 シームス(本社東京都) 化学賞

ワサビを使って聴覚障害者などへ火災を知ら

せる「臭気発生装置」を開発(熟睡中でも鼻

づまりの人以外1〜2分で必ず目が覚める。)

他国では大熊に襲われても安全なスーツの開発

や、敵兵に同性愛の感情が芽生えれば士気を失う

化学兵器「同性愛爆弾」も受賞している。

私が特に心惹かれたのは、2008年北大の中

垣教授の平板上に迷路を掘り、粘菌をばらまき、

迷路の一端に栄養となるエサを置くと、散在して

いた粘菌が一斉に連絡を取り合い、最短距離でエ

サ場に全員集合したという事。こんなバクテリア

でさえ、今日まで生き延びた生物は、それなりに

高度の進化を遂げていたということ。それゆえ、

人類だけが特別に進化した「傑物」とは言えない。

単細胞の生物を、なめたら、あかんでエ!

行事としての青屋箸について、今回は四回目にな

ります。更科公護氏の原文を先月号(当会報六十五号)

から続きをご紹介しましょう。

『そこでいろいろ調べてみた結果、ススキやヨシやチガヤ・マコモなどが神社の神事に意外に多く用いられており、それがいづれも神聖にして霊力ある植物としてとり扱われていることがわかった。また民間でも右の植物がいろいろな方面でやはり霊力となって用いられていた。

葺(アシヨシ)や茅(チガヤ)や薄(ススキ)菰(マコモ)などが神聖にして霊力あるものとして扱われていることは、一例をあげれば、チガヤやマコモは神の御神体や、クサモトガタが奉製されたり、ヨシやススキの穂は神の依代(ヨリシロ)ともなり、またそのまま祓具となって邪気を払うものに使われる。とくに六月晦日には全国の諸神社で広く行われている夏越祭の茅ノ輪神事は、チガヤやススキ・ヨシなどで作られた大きな輪をくぐり抜けることによつて、身の汚れや災厄を払い抜けることになっている。

なお葦・茅・薄などがいづれも清い草であり祓邪力があるという思想は、実は日本古来のものではなく、古く中国より伝来のものであつて、これがいづれも清い草の根元となつてきていることについては、いづれ「カヤのもつ霊力」と題して発表したいと思う。

さてここで青屋箸の意義について考えてみよう。青屋箸の行事は青いススキによつて災害を除く行事であることは以上によつて容易にうなずかれるが、青屋箸とあまり日に距たりのない夏越祭の茅ノ輪くぐりは、チガヤやススキで作られた輪をくぐることによつて身の汚れを払い、そして災厄を

### 青屋箸(四)

兼平ちえこ

更科公護著「常陸の青屋祭について」より民俗

除くのであるから共通した性格をもっている。単に青屋箸のご利益だから考えると、茅ノ輪くぐりはもっぱら身の汚れを払うのに対し、青屋箸の行事はこれから起こる災害を除くためのもの、いわば祇園際の災害消除と同様のものとみることが出来る。青屋祇園（なまってオーヤの祇園とよばれている）や新箸祇園の名は祭の性格をよく表わしているといえよう。

しかし、これはやはり一つのものであったらしい。香取群書集成第一巻の、香取志上卷末社並雑金之事の中に、青屋祭が夏越の祓として行われていたことが次のように記されている。

忍男オシヲノ神社 又東宮ト云フ

神宮を相距(?)十六町計、津ノ宮村ニ在、彦火々出見(ヒコホホデノミ)尊を祭レリ哉「伊葬諾尊云フ、此社ノ祭、六月晦日名越(ナゴシ)ノ祓あり、神庭停(カタハラ)に今年生(コトシオヒノ)竹を柱とし、薄を茹(カリ)て屋根を葺(フキ)、祠を造(ツクリ)、種々物を備、又薄の箸を作り備へて祭る、是を青屋祭と云フ、是より先キ今年生の竹を伐(キ)テ、薄を茹(カラ)ズ、又此日祠職の家より始めて神地神戸ノ民に至ル迄、家毎に薄箸(ススキバシ)を作り、神に捧(ササゲ)、己にも是を用、此日ノ祭に早瓜(サウリ)を捧奉る故ニ惣(スベ)て今年出生の野菜菓何(ヤサイコノミ)によらず、此日先ヅ神に捧奉て後に喰初む、

(後略)

なおこの香取神宮の撰末社である忍男神社の青屋祭は六月晦日津ノ宮の忍宮において行われた祭であるが、上古は同じ津ノ宮の沖ノ宮(住吉神を祀る)で行なわれておつたのが、沖ノ宮が荒廢して忍男宮で行なわれるようになったと伝えられており、

青屋祭は、その日の申の刻(午後四時〜六時)に祠員が浜の鳥居の渚に臨んでミソギをし、忍男宮の庭上で祭りを行ったものである。茅ノ輪くぐりの行事も申の刻に行われるものであって、香取神宮でもこの日祇園において菅ノ祓(茅ノ輪くぐり)が行われていたことが祀されてある。』次回に続きます

薄や茅・葺等には、これから起こる災害を除くためのものとして(青屋箸)、身の汚れや災厄を払うものとして(茅ノ輪くぐり)、農作物の害虫を追いやるためとして(虫送り)、そして遙拝の為の臨時の齋場として、神の御神体や神の依代ともなり、古代より神聖にして靈力のあるものとして、各地で扱われていたことにあらためて薄や茅・葺等の秘めた不思議な力を知る事となりました。私にとって特に薄に関しては葉によつて傷つけられるものとして幼い頃には避けていた植物であった。

- ・ ひだまりに薄ふつくら
- ・ 秋色どつさり 柿の木一人 ちえこ

## 山越え 谷こえ

伊東弓子

自転車で行くとよく耳にする。

「玉里ってここは、何て坂の多い所なのかしら」

「坂ばかりあってイヤなっちゃうわ」

車では感じないだろうが、自転車を押して坂を登る人達のぼやきの声だ。

「そうね」

と相槌を打つが、新しく住み始めた人だと分か

ると玉里の地形を説明してあげる。霞ヶ浦が海であった頃の大きな入江が四つ村の中に入り込んでいた。その間に五つの台が出来ている事。入江は田や谷津田となり、台は畑や林、里山を作り上げているので坂が多い事等を…。又相手によつては人の一生も山あり谷ありですとハンドルを並べながら語り合うこともある。

この土地に長く住みついてきた人達はどうかたろう。歩き時代は辛かったという。畑に行くにも坂を登り、田から帰りも坂を下る。背負籠に行きは農具を入れ、帰りは入るだけ入れて坂を行く。重かっただろうに。朝空車を引いて出かけても夕べには何十倍もの収穫物を積む。上り坂は大勢で押しでも大変だったそう。雨に濡れ風に吹かれ、暑い陽射しに頭を焼かれ、冷たい霜柱で足が凍り、上り下りした坂道だったろう。女達は食事仕度に走って戻り、乳を含ませる為には駆け上った坂。そういう坂には人間生活の笑いや涙がある。働く人の汗や埃が染み込んでいるだろう。人の苦勞や喜びを知っている坂には、いろいろな意味の名前がついていったのだと思う。

滝の坂、このまの坂、神田坂、入の坂、竜王の坂、良善坂、六万坂等身のまわりにあるが殆どその名を呼ばなくなってしまった。今車で簡単に通り過ぎてしまう。地域の人は何を感じながら行き来しているのだろうか。この土地での生活に追われなくてもいい。広範囲に簡単に移動出来る車がある。「坂」の名を使う必要もなくなった。でも私達の人生には「坂や谷」は続く。

あれは独身時代、テレビが部屋の一隅に置かれて間もない頃だった。白黒の小さな画面の中に荷車を引く男と、押す女の姿が映し出された。コマ

ーシャルだったのか、物語だったのかは覚えていないが言葉だけは確りと覚えてる。「夫婦。それは長い人生という道を登り降りしながら越えて行く、狸と狐の化かし合い」というものだった。結婚生活を夢見ていた私にとつて、そんな筈はない。騙し合いだなんて有り得ないと思っていた。

結婚した当時は隠すこともなく何でも話せた。又話すことが次の日、次への希望を産み出していくと信じて生活していた。この頃は足取りは軽く平坦な道を歩いていたのだ。

仕事と家庭と子育てと自分の回りが複雑に量が増える中でエゴが顔を出し始めた。自分の事を主張することが多くなった。

親のやりとりをみながら子供達はどんな心を育ててきたのだろう。この頃の道は大きな坂、小さな坂を走りながら、草も踏みつけ土を飛ばし、駆け登り滑り落ちたりして超えてきたように思う。

ふと気がつくともう我武者羅なこととは出来なくなっている事に気がついた。成長した子供達は離れていった。沢山の時間が出来た反面、心身の衰えを感じ始めた。これからの坂や谷をのり越えるには今迄以上に辛拘があることだろう。

去年の夏の始めに貴方は体が不自由になった。どんなにかショックだったでしょう。今まで足が自由に動いた。時間をかけて買物の品物運びもじつくりやっていた。手もよく動き物を運んだり、料理も上手だった。車で何処へでも行ってくれた。孫の所へ子どもの所への用たしと。本を読むことも好きだったし、歌も話しも得意だった。発掘の仕事もなくなつた。そういう貴方をどう力づけたらいいだろう。訓練もしなくちゃいけない。甘やかすだけではだめだし、貴方にとつても私にとつ

ても今迄にない高い坂が低い谷が目の前に立ちふさがつた。

考えた末に思いついたのは焦らず、貴方のことをよく見ることから始まった。その状況に寄り添つていこうという気持ちで接しよう。

感情では怒りが強いようなので、一緒になつて怒らないようにしよう。都合悪くなると「不自由なんだから無理させるな。出来ないんだからやってくれ」という。興奮してきたらその場を離れてみる。「しらんぷい」という気持ちも加わっている。動かなくなつてしまつたらと心配になる。そんな時は「この家には鬼婆がいるからね、すこしは言うこと聞かない」と笑つて脅したりする。

男の人つて喜びや楽しさをあまり表さないけれど貴方はよく笑うようになった。素直になつたのかと思う。じゃ一緒に楽しみ合おうとふざけてみた。ごみを箱に入れずに机の上や下に何日でも置くので「腰曲げるのがいやな人は足で蹴ってください」と言つてみた。その後笑いながらやつていた。

泣くことはみたことがないが聞いてみた。「いつでも泣いている。お前がよく笑うというのは笑いではない。泣いている姿だ」とのこと。

「そうだったの、じゃ大声で泣いてね。おとつあん、おつかさんつらいよ。ゆみこが虐めるよ」と他愛無いことを言つて大笑いした。

体の動きが遅く細かい動きにも苦労している。喉が細くなつたのか常にガアーガアーグウーグウーと苦しそうだ。私も一緒に声を出してしまう。

「カエルの歌がきこえてくるよ、ガアッガアッガアッガアッガアッガアッガアッガアッガアッ」と笑つちゃう。

お茶の時間、お茶をつぎ終わるのももどかしいのか、自分だけ始める。「ああ！ ご飯を作つてあげてるのは誰でしょうね。その人の分はないのでしょうか」と笑わせる。

洋服着るのも靴を履くのも時間がかかる。幼い子が一人で一生懸命ボタンをかけようとしている姿にも似ている。「洋服着るのもほーらね。お靴を履くのもほーらね。何でも一人でできます」「うるさい」と怒鳴る。悪かつたとも思うが「幼稚園の方からレコードが流れてきたんだからね」と言つて軽く流す。

時々悲しさや淋しさの影をふつと感じるので吹き飛ばしてやりたい。テレビからヒントを得たカングルーの足蹴りごつこの遊びも愉快だ。お風呂に入った後カンカン娘ならぬあきカン娘の踊りをご覧あれ、とブラジャーとパンティーで踊りを見せたり、今迄出来なかつたようなこともする私の変身ぶり。鏡を見て身だしなみを整えている後から「いい男橋爪さん！ 私はフォンです」と賑やかにしている。外に出た時でも「愛のメッセージです」と電話をかける心がけをしている。

本当に一つ一つがいとおしい姿だと思う。貴方が健康だった時、私は随分と威張つていたことを反省します。もうこれからは対等に争いは出来ません。少しでも明るく言葉を見つけている私。少しでも楽しくと工夫している私。長いことしてきた保育の仕事が今支えてくれてる。歌がお話、が、言葉かけが泉の様に湧いてくる。有難いことだ。大きな体の幼子との毎日の暮らし。これも私の行く坂であり谷であり、又貴方も毎日毎日の坂を登り谷を越えていくのですね。老いにきた苦をのりこえていく二人はやっぱり狸と狐ですか。

### 旅人(3)

小林幸枝

沖縄旅行の第三回目になります。

八月十六日、石垣島から沖縄に入る。友人が那覇空港まで迎えに来てくれた。沖縄は四年ぶりとなる。沖縄南部の観光スポット。

#### ○旧海軍司令部

沖縄戦で使われた地下壕。約四千人もの将兵がここで自決した。司令官室をはじめ、当時のままに保存されている。

#### ○垣花桶川(名水百選)

名水百選に指定されている湧水。石の樋を通って勢いよく湧き出す水は古くから大切にされ、今も飲料水として使われている。ここからの景色は最高で、美しく心癒されます。

#### ○知念城跡

立派な城跡がある。高台にあるので景色が素晴らしい。資料館があるがこの日はお盆でお休み。

#### ○斎場御嶽(せいふあうたき)

世界遺産史跡の一つ。琉球最高の聖域とされ、王朝にとって最も格式の高い御嶽。第二尚氏王統、第三王の尚真が整備したとされる。現在は誰でも入れるが、宗教的儀礼を司るのは全て女性であったため、昔は王といえども奥の聖域に立ち入ることはできなかった。四年前、ここに来たけれど、今では人気スポットとなり綺麗に改修されていた。

夜、浦添市に行って飲み会に参加。世界ろうあ者バレーの友人たちと二十三年ぶりに再会。皆まだ若々しくて、歳を感じさせなかった。おかげで遅くまでわいわい騒ぎ、ホテルに戻ったのは深夜三時。

八月十七日、伊江島。

沖縄の友人の奥さんは伊江島出身で、案内をしていただいた。伊江島は本部港からフェリーで三十分。

#### ○アーニーパイル碑

第二次世界大戦中、米軍の従軍記者として激戦の取材中亡くなったアーニーパイルの慰霊塔。毎年四月第三日曜日には在沖縄米軍人らが参列して慰霊祭が行われる。

#### ○ニイヤティヤ洞

戦時中は防空壕として利用され、多くの人を収容したことから「千人洞がま」とも呼ばれる。子宝の石とされる「力石」があり、持ち上げて軽いと感じたら女兒、重いと感じたら男児が授かるという。五臓六腑の神様が現れるという言い伝えもあり、島の拝所でもある。

私は「力石」を持ち上げてみたら軽いような重いようなとはつきりしませんでした。洞の前が海で、眩しく青の色が光り、美しい所であった。何時間坐っただけでも飽きることがないように思えた。

伊江島は歴史が深く、ゴヘズ洞穴、アハシヤガマ、ミンカザントウなど沢山の史跡や文化財、歌碑などがあります。

#### ○湧出(わじし)

湧出とは真水が湧き出てくるところという意味で、絶壁の北部海岸波打ち際にあり、水事情の悪かった昔は重要な水源であった。湧出の近くまでは道が整備されているので降りていくことが出来る。

#### ○城山(ぐすくやま)

島の守り神で、シンボルでもある。タッチュー

とは沖縄の方言で「とんがっている」と言う意味で、急こう配の道を十分ほど登ると頂上につく。頂上からは360度の青い海が見渡せる。伊江島一番の美しさであった。

#### ○島村屋観光公園

沖縄芝居の三大悲歌劇の一つ、悲恋物語「伊江島ハンドウ小ぢわし」の舞台となった島村屋の屋敷跡にある公園で、資料館やハブ飼育所などがある。

#### ○芳魂之塔(ほうこんのとう)

伊江島は第二次世界大戦で激しい攻撃を受け、多くの人命と財産をなくした。芳魂之塔では毎年四月二十日に平和祈願祭が行われ村民、軍人およそ三千人の霊を吊っている。

#### ○ヌチイドウタカラの家(反戦平和資料館)

ヌチイドウタカラとは「命こそ宝」という意味で、平和を願う伊江島の人々の悲願から生れた資料館である。

#### ○伊江ビーチ

白砂で遠浅の美しいビーチです。ノンビリと過ごしたかったけれど時間がなくゆつくりすることが出来なくて残念。

次号にまた続きを。

この夏の沖縄の海を思い出し、十一月十一日〜十三日公演で舞う舞いをイメージして組み上げました。公演での海は、霞ヶ浦ですが、古代の霞ヶ浦は沖縄のような青の海ではないでしょうが、もっと綺麗で豊かだったのだからと思います。

ギター文化館ならではの、大島さんのギターコラボを是非ご覧いただきたいと思えます。

## 《特別企画》

虚構と真実の谷間

第三章 因果応報の範囲 (6)

打田昇三

前編で述べたように源頼朝が石橋山で挙兵し、これを伊東祐親と大場景親らがコテンパンに叩きめした。ところが房総半島に逃げた頼朝たちは桓武氏の子孫である豪族たちに援けられて二か月もしない間に鎌倉まで進出してきたのである。それが治承四年(一一八〇)の十月六日のこと、これに対して平家軍は準備が思うよういかず、九月末になって、ようやく京都を出発することが出来た。そして、東海道を下って行く途中で得た情報により、頼朝ばかりか甲斐源氏と、信濃の山中に突然、現れた木曾義仲が反平家勢力として大きくなっている事実を知ったから、不気味に感じていたのである。平家方では木曾義仲という人物に心当たりが無かった。

昨今は三月三日の雛飾りをまとめて町おこしの真似ごとをするのが流行している。飾られる人形も多種多様であるが、確か標準的なセットには「桜」と「橘」が付いていたと記憶する。これは内裏の正殿である紫宸殿(しんでん)の南庭に植えられていたものを模したものである。雛祭りとは縁遠い話であるが平治元年(一一五九)に起こった平治の乱では、この桜と橘の周りを駆け巡って平重盛と源義平とが死闘を展開した。一騎討ちの決着はつかなかったようであるが、源氏は負けて義朝、義平らは斬られた。十四歳の源頼朝だけが不思議な因縁で命拾いをした。

その義平は「鎌倉悪源太」と称しており十五歳

で武蔵大蔵館の合戦に於いて叔父の帯刀先生義賢(たてわきせんじょうよしかた)を討ちとつた。先生と言っても教師ではなくて「先任者」と言う意味で、殿上に奉仕する舎人(とねり)の管理職で武芸に長じた者をこのように呼んだのである。義賢は、その職を辞して秩父辺りの豪族の養子になったようであり、それが鎌倉を拠点として勢力を広げつつあった兄の義朝と領地を巡るトラブルになり、遂に兄弟で合戦を始めた。一族で喰い合いをする源氏らしくて結構なことだが、その時に義朝の息子・義平が悪源太の名に恥じない活躍?で叔父さんをやっつけた。尤も「悪」と言うのは現代の悪と違い「型破りの武勇」ぐらいの意味であつたらしいから、罪に問われなかった。

義賢には駒王丸という二歳の子がいた。当時の合戦の勝ち負けは、現代のゴキブリ退治と同じで根こそぎ絶やさないと効果が薄かった。その点から考えると源頼朝が平家に助命されたのは正に奇跡に近いのであるから、天に感謝して功德を施さなくてはならないのに頼朝はそれを逆手に取って多くの人物を粛清したから、自分も狙われた。

兄弟対決で弟を殺した源義朝は、遺児の駒王丸を探し出して消すように家臣に命じた。この報いで後に息子の頼朝の子・千鶴丸が伊東祐親に谷底へ抛り込まれることになるのだが、未だそれは分からない。命令を受けた東国の武士たちは「嫌だ」と言えば自分がやられるから「何とか見つからないように……」祈りながら探した。こういう場合には願いが逆に叶うもので、駒王丸は畠山重能に捕らわれた。しかし重能は殺すことが出来ず、そうかと言ってぐずぐずしては義朝に知れてしまうから武蔵国の斎藤實盛に預けた。

實盛は信濃国の奥深い木曾谷に居る豪族の中原兼遠に頼んで引き取って貰った。都合良く、實盛が属する党から出た女性が駒王丸の乳母であり、その女性が中原兼遠に嫁していたのである。中原氏は近江国に広がった古代王朝系の名族らしい。駒王丸は兼遠の子供たち今井兼平、樋口兼光、巴御前と一緒に木曾山中で大きくなった。此の三兄妹は最後まで木曾義仲に従っている。

義仲が二十七歳の時に前編で述べた叔父さんの源行家が頼朝に「平家打倒」を勧めてから木曾までやって来た。この呼びかけに頼朝は即答しなかったが、社会情勢に疎かった義仲は二つ返事で引き受けたと思われる。源平盛衰記には「……木曾は屈強の城郭なり……たとい数千萬騎を以ても攻め落すべきようもなし……」と書いてあり、天嶮ながら都への街道にも通じる木曾での挙兵が平家には重大事と取られたことが推測できる。平家は中原兼遠を呼んで厳しく事実を糺したところ兼遠は「義仲の父親の義賢は頼朝の兄(義平)と父(義朝)に殺され、二歳の孤児が哀れで育てたのであつて、義仲が頼朝に合わせて謀反を起こすことは有りません……」と答えた。それでも心配な平家側は兼遠に誓約書を書かせて義仲を連れて来るように命じたので、兼遠は止むを得ず根井小彌太と滋野行親の兩名に義仲を預けたことになっている。しかし平家物語では根井、滋野兩名の武士が、最初から木曾義仲の同志だと書かれている。木曾山中の出来事であるから正確な情報が伝わらなかったのだからうけれども、山中で結成されたこの武士団は実に強くて瞬く間に信濃から北陸を攻略した。

寿永二年(一一八三)六月一日、後に源義経の一行が弁慶の読み上げる偽勸進帳で越す安宅関で合



戦が行われ、平家軍に加わっていた老武士の齋藤實盛は白髪を染めて戦に加わり、木曾の手塚太郎光盛という武者に、わざと負けるようにして首を取られた。木曾義仲の本陣で行われた首実検でそれが幼なき日の義仲を助けた實盛であると樋口兼光が気付いた。義仲は手厚く恩人を弔ったと言われる。「むざんやな 甲(かぶと)の下の きりぎりす」芭蕉の名句はそれをテーマにしている。

其の時代に比叡山延暦寺は大勢の僧兵を擁していたのだが、その様な事情は知らない義仲は延暦寺に脅迫状のような手紙を出して「源氏に付くか平氏に味方するか、態度をはっきりさせろ！」と申し入れた。延暦寺側は怒ったけれども、敵わないと知って門を開いたから、木曾軍は比叡山を本陣として京都を見下ろした。是を知った平家は六波羅などの屋敷に火を放ち、安徳天皇を奉じて西へ落ちていった。荒れ果てた京の都は木曾義仲が抑えることになった。先に「平家追討の以仁王令旨」を配達して回った源行家は、頼朝に嫌われ、木曾義仲に同行していたようである。

平家は未だしも同族の義仲が自分と対等の位置にあることは自尊心の強い頼朝にとって我慢のならないところである。さらに義仲は、元暦(げんりやく)元年(一一八四)正月、頼朝が欲しくて堪らなかった「征夷大將軍」に任命されて従四位の位を貰った。將軍様にはなったが三十年近くを木曾山中で過ごした義仲は、天皇や公家が決めていた当時の権力機構を知らなかった。

頼朝も伊豆で二十年ほど流人生活をしたが少年時代に貴族の暮らしをしている。この違いが官僚の頂点に立った際の大きな差になり、京の都での

木曾義仲の言動が首都で否定されることになる。後白河法皇は「平家追討の功績は源頼朝が第一、木曾義仲が第二、新宮十郎行家が第三」と新聞に発表して義仲を牽制すると共に、頼朝の上洛をうながして来た。頼朝は弟の範頼と義経を西に向かわせた。義仲を討つためである。平家を倒すという目的を持った源氏同士であるから協力すれば良さそうなものだが、裏の事情がそれを許さない。現代の政治と同じで、国民などは放り出して主導権を奪い合う醜い争いが日本中にはびこる。

その頃、源頼朝は鎌倉に居て東国は抑えたけれども、西は平家に支配されたままであった。義仲が木曾から出て北陸を支配し京都まで抑えたとなると「東日本」「東海」「西日本」とJR並みになってしまふ。さらに頼朝と義仲と源氏同士が骨肉の争いを展開している間に、平家は西国で勢いを盛り返していたと言われる。平家側は苦し紛れに木曾義仲と連携して鎌倉の頼朝を倒す策も考えていたらしい。もし、それが実現していれば日本の歴史はどういうことになったで有ろうか：出来れば見てみたいような、見たく無いような：源平連立内閣はともかくとして、勢いを盛り返した平家の軍力はかなり強大であったらしい。それを行使出来ずに平家が滅びた原因というのが「一の谷の合戦の敗戦」であり、先に述べたように誰かさんが考えた「閉じ込め詐欺」が影響していたと歴史学者が分析している。

敵である平家からも頼りにされるほど強かった木曾義仲は、大功を立てながら、どうでも良いような権威主義と朝廷公家の因習に翻弄され、後白河法皇の策謀で自滅せざるを得なくなる。征夷大將軍に任じられて喜んでいられる頃、頼朝の命令で派

遣された「義仲討伐」の軍勢が京都に迫っていた。義仲はこれを瀬田と宇治の二か所で防ぐことになり、宇治川の合戦では佐々木高綱と梶原景季とが頼朝秘蔵の名馬を巡って競いながら先陣争いをした話が知られる。木曾軍は敗れ、さらに六条河原での合戦にも壊滅的な負けを喫して、残る兵力は僅か三百余騎。これが敗走して北陸へ退くべく敵の囲みを突破して近江路に至ったときには義仲主従のみ七騎しか残らなかった。

それも散り散りになり、幼い頃から共に育った今井四郎兼平と二騎だけになり栗津松原に来た。義仲は兼平に勧められて自害する場所を求めると、馬が深田に乗り入れ動きが取れなくなった。そこへ飛び来たった流れ矢が兜の内側を射た。頭を少し傾けていけば矢は兜に当たる場所である。この場面を日本外史は次のように記している。

「…義仲、奮戦して盡く其騎を亡(ことごとく)そのきをうしなふ。独り兼平あり。兼平乃一邱樹(かなひら、すなわちいちきゆうじゆ)を指さし、義仲に謂て曰く、『君彼(あなた)に赴きて、徐に(おもむくに)計を為せ(自害するように)。臣請ふ、此に拒(ふせ)がん』と、義仲、田を徑りて(よきりて)邱(丘の上)に赴く。馬、淖に陥る。(深田にはまる)顧て兼平を視る。箭、額に中りて死す。年三十一。兼平、方に奮闘し、箆(へびら)に八矢を餘す。射て八騎を斃す。敵中に『木曾公死せり』と傳へ呼ぶを聞く。曰く『吾が事終れり』と。刀を啣み(ふくみて)馬より墜ち、自ら貫て死す』：兼平は残っていた八本の矢で敵の武將八騎を射倒したけれども、義仲が射られ、追って来る敵陣から「義仲公が死んだ」と言う声が聞こえてきたので、今は是までと太刀をくわえて、馬から落ち壮絶な死を遂げたの

である。

「木曾殿と背中合せの寒さ哉」という芭蕉の句がある。これは又玄(いうげん)と言う伊勢の俳人の作らしいが、琵琶湖畔・大津市の義仲寺には木曾義仲と松尾芭蕉の墓があるために芭蕉の句として誤伝されたようである。芭蕉は木曾義仲に共鳴して義仲寺に庵を結んでいた。義仲寺は、戦国時代に近江国の守護職であった佐々木義賢という大名が石山寺に参詣の途中、畑の中に立つ粗末な墓石が義仲のものとなり、菩提を弔うため義仲が討ち死した場所近くに建立したと伝えられる。

それより先、木曾義仲は頼朝との関係に配慮して息子の志水冠者義高を頼朝の許に差し出しており、頼朝は義高を政子夫人との間に生まれた長女・大姫の婿としていた。義仲と頼朝との関係が険悪化した原因を、甲斐の武田信光(一条忠頼の弟)の讒言とする説もある。義仲の存在が知られるようになり、信光は娘の婿にと義高を望んだところ義仲が「…志水冠者の側室なら(源氏でも甲斐は傍流なので正室には…)」と言ったので、これを怒り木曾を滅ぼそうとした、とする説もあるようだが真偽のほどは分からない。自分より優れた者は手当たり次第に消した頼朝であるから、強過ぎた木曾軍は狙われて当然かも…一番に考えられる理由は、以仁王の令旨を配達した頼朝の叔父さん・新宮十郎行家が自分の功績を言い立て、頼朝に領地を要求して断られた。それから行家が義仲を頼ったことが頼朝を怒らせたらしい。

頼朝の婿と言う名の人質となった義高と大姫とは仲睦まじ若夫婦として鎌倉に過ごしていた。義高の母親は中原兼遠の娘、つまり義仲に殉じた今井兼平の妹とされる…と、すると「木曾の女武者」

として知られた「巴御前」かも知れない。頼朝と義仲の関係が険悪になり、頼朝が人質を要求してきた際に小室太郎という重臣は「平家追討の大義を達成するために人質已むなし」と主張し、兼平は「兵衛佐(頼朝)殿とは上手くゆく筈が無い。幼い御曹司を人質に出すくらいなら鎌倉と戦いましょう…」と主張した。義仲は思案の末に義高を鎌倉へ行かせたのである。出発の日、義高は自分の運命を覚ったように、これが見納め、と弓を射て出立したと伝えられる。時に十一歳である。

父親の義仲が栗津で討ち死にした後も義高は大姫と暮らしていたが頼朝は先のことを思うと安心が出来ず、密かに「義高殺害」を家臣に命じた。大姫には秘密の筈であったが侍女が聞きつけて大姫に告げた。大姫は父親の無慈悲を恨む暇も惜しく義高を逃がすことにした。木曾から義高に付き添ってきていた海野某を寝所に伏せたり、居間で大姫と双六遊びをしているように見せかけ、その間に義高は女装して鎌倉の館を抜けだした。しかし義高が居ないことは、その日の夕方に発覚してしまつたから、頼朝は直ちに追つ手を出して街道の要所を塞いだ。それでも義高を気の毒に思つて匿う者が居たようで、ようやく五日目に「入間川(武蔵国)で志水冠者義高を殺害した」とする報告が頼朝にもたらされた。

このことは大姫に伏せられていたのだが鎌倉時代にも秘密を漏らす公務員が居たようで、重大事だけに情報は直ぐに漏れた。大姫は嘆き悲しんで飲食を絶ち、義高を慕い続けた。翌月になつても大姫の悲しみは消えず、痩せ細つて床に伏すばかりであった。周りの者も困り果てたが、怒りだしたのは政子夫人である。殺させたのは旦那の頼朝

なのだが、出来が悪くても將軍になる人物であるから政子も旦那に喰つてかかる訳にもいかない。そこで義高を実際に斬つた武士に八つ当たりをして「いかに主君の命令だとしても、真つ先に大姫に報告するのが家臣の道であるうに、いきなり義高殿を討つて手柄顔するのは憎い限りじゃ。大姫の病気は、そやつの所為です。彼の者を死罪にしたく思います…」と頼朝に言つた。これは言いがかりと言つても、当時の武士が主君の命令に「ノー」と言つたり、下手な相撲のように「待つた」を掛けることも出来ない。

政子夫人のバックには北条一族が付いているから「俺のすることに口を出すな!」とも言えず、困つた頼朝は、入間川で志水冠者義高を斬つた藤内光澄という武士を斬つて曝し首にした。これで変則的ながら夫の仇討が済んだ大姫は、徐々に氣力を回復したが、勧められても再嫁することなく三十前後で亡くなったようである。この出来事で思い出されるのは、頼朝の長男・千鶴丸が伊東祐親によつて伊豆・松川の淵に投げ捨てられ自分が伊豆を追われた事件である。我が子を虐殺された親の気持ち痛いほど分かつていた源頼朝が、自分の娘と相愛の夫婦であつた婿の義高を家臣に殺させる…大姫の生涯を無駄にした報いは大きい。

## 《ぶら》の《》

「ザ・パスタ・アレンジ」書友・書友会  
料理のお店です(ギター文化館通り)

看板娘(大)「うらら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

03-6600-0000

## 【風の談話室】

今月は、嬉しい月となった。陸平ヨイシヨの会様から二本の投稿を頂いた。中でも市川様の「待つのは「ゴドーだけ」と戯曲に引掛けるお話は嬉しい。この話に、当風の会もますます独りよがりと言われても「棚から牡丹餅」など考えず、言いたい事を言い続けたいものである。

### 《ヨイシヨな話》(陸平をヨイシヨする会)

縄文池幻想　〜美浦陸平より〜　市川紀行

手話朗読舞の小林幸枝さんと美浦の舞踏家柏木久美子さんが「ことば座」主宰者の白井啓治氏の独創的語りとおカリナ奏者野口善広氏の透明な響きにのせて私たちを魅了した陸平貝塚での縄文の森コンサート。つい昨日のように思い出される。いい集いだった。いい一日だった。日本中、まさにここ陸平にしかない史上初のパフォーマンスであった。地域に根ざす手づくりの文化の花でもあった。

その陸平貝塚(国指定史跡)の小高い丘の台地から、東西に二本の清水、湧き水が流れ落ちている。昔から地元の人々は「ぶくぶく水」と呼んでいる。水源は丘の台地と取り囲む縄文の森。かつて縄文の早期から万年を超えて居住された場所から貝塚の貝層をくぐり、樹々たちの根をくぐり地下水となつて泉のごとく流れるぶくぶく水。縄文人たちはこれを生活の水としたのは間違いない。陸平貝塚は全国唯一といつていいほど周囲を含めて当時の状態景観を残している貝塚遺跡であるからだ。戦前は勿論戦後も土地改良が進むまでは、もっと

下流に蔵後池という溜池があり、そこへ流れ込んだと思われる。実際に農業用水として使われてきた。この蔵後池については中世の伝説として、日照りや大雨に泣く村人を救った賢明な領主生田満盛の話があり、美浦の昔物語(増尾尚子編著)に収められている。

陸平貝塚の国史跡指定には「陸平をヨイシヨする会」の創造的ボランティア活動、保存活動が大きな力になったが(縄文の森コンサートもこの会の企画主宰である)、今そのぶくぶく水を生かして「ヨイシヨの会」と池元安中小学校児童が赤米黒米の古代米を毎年栽培収穫している。手植え手刈りの天然乾燥である。私は村長時代、この陸平貝塚の保存活用を計画した当初からこの湧水による「縄文池」の再生を願い計画にも入れてきたが中々実現できなかった。フリーになって十年余、昨年暮「何とか池をつくり出そうよ」とヨイシヨの会で村担当に金をかけずにやる協力を頼んだ。そして今年の春先、聞く耳を持った当局は建設部を中心に知恵を出してくれ、格別の予算を組むことなく充分の広さの「縄文池」が出現したのである。ガマやマコモに荒れ果てた湿地に自生の水柳が二本。それを中心に残して小さな島もつくった。後に私たちはこの島の名前を募集し、「ヨイシヨ島」と名づけた。ひと月もするとぶくぶく水は古代米の田んぼを過ぎて流れ縄文池に水を満たした。旅立つ雁が数羽飛来し、翼を休めているのも見られた。多分永遠に、降雨という現象がある限りぶくぶく水は湧き続ける。千年の後、この池とヨイシヨ島は本当の縄文池として陸平の風景の中に語ってくれるだろう。

さて、私がこんな陸平の出来事を記したのは仲

間たちと話した夢があるからである。その夢はこの「ヨイシヨ島」を舞台ステージにすることである。晩い春の宵、或いは中秋の月の霞ヶ浦に上る頃、たとえば手話舞を更に深めた稀有の舞姫小林幸枝と熟達の柏木久美子がかすかな光を浴びて縄文の物語を舞う姿である。たおやかな舞い。おだやかな水面に物語の声と音楽が映る。池の端いにしえの円形劇場を埋めた人々のように村人たちは瞳をこらす。縄文の幻想——地域でつくるこの地だけの文化の姿。真の地域性はいつでも普遍の本質につながっている。

地域の夢や多様性を壊しきって、なおもしがみつく原発の亡者共はここでは触れない。白井氏がいつも云っているように、そして私もまた実践してきたのであるが「地域おこし」も「まちおこし」も誰かが来て「おこし」てくれるのではない。まずは自らがおきることなのである。「ゴドー」のように誰かを待たせても誰も来ない。何もおこらないのだ。「ふるさと風」も「ことば座」も、「ヨイシヨする会」も、小さな声でいえば私の「劇団宙の会」も、それぞれの色は異なっているが主体的に「起き上がった」人々の姿だとあえて記そう。

縄文池のその後を付け加えておきたい。ぶくぶく水は純正の真水で当初はアメンボウが弾ねるだけであったが、水草も生えプランクトン類も増えてきた。ヨイシヨの会の「お魚博士」が真正の外來魚のいない生態をつくろうと地元由来の魚類を小学生たちと捕まえて放流した。地域ぐるみでどこまで行けるか楽しみである。

末筆ながら「ふるさと風」の研究や名文にはいつも感銘を受けながら拝読させて頂いており、御

礼を申し上げたい。特に今回は先号の打田昇三氏に僭越ながら個人的に御礼を申し上げる次第である。――「日高見の国」が当てはまる場所は村民一致で古代からの遺跡を保護傳承している美浦村近辺であった。正に天道誠を照らすである。――個人的にはとは、私は当時の役所跡を示す地名も多く残る美浦村信太の住人であるからである。微笑感謝!!

## 陸平繩文ムラまつり

田島早苗

エチオピア・アフール低地は「世界で一番暑い場所」だと言う。気温が五十度を超す日が三ヶ月も続き「火の風」と呼ばれる熱風が吹く砂漠、火山から吹き出すマグマ・・・想像を絶する過酷な土地を、元オリピック選手だった俳優・藤元隆宏さん達が訪ねると言うテレビのドキュメント番組を見た。

そのような環境の中でも人は生きて行けることが驚きの第一歩だった。「昔から此処で暮らして来たから、これが当たり前のこと」と淡々と語る長老の穏やかな顔、雨は一年に数えるほどしか降らないが、小さなわき水があつて、命の水として大切に守ってきたという。「水は幼い子供から順番に飲む」乏しい水を分け合つて飲むためのルールはきちんと守られているようだ。山羊を飼い、絶えることのない地の塩を掘り出すのが唯一の仕事。ミネラルの豊富なその塩は、珍重されて、山羊の皮に入れた水を積んだらくだの隊商がやって来て塩を運んで行く。熱風の中で工夫を凝らしながら肩寄せ合っている家族の姿に、生きることの原点

を垣間見たような気がした。

縄文時代の陸平にも、きつと穏やかな家族愛に満ちた暮らしがあつたのだろうとしきりに思うひとときだった。

美浦村では、十月二十三日の日曜日に恒例の「陸平繩文ムラまつり」が行われた。

前日のテント張りは、最悪の天気予報通り朝起きたら土砂降りだった。ところが、集合時刻の九時ごろには雨がやみ薄日が差し始めたのだ。でも夕方から天気が崩れるという予報に皆心落ち着かず、作業に追われていた。

顔見知りの仲間に出会うたび「明日だけは天気予報がはずれて欲しいね」が合言葉のように飛び交う。私が「宇宙や星からも電波が届くのだから、皆の念力を集中して送れば雲を吹き飛ばすことができると思うよ」と言ったら、特養老人介護施設の所長をしている仲間が「すごいこと言う、間違いないく認知症の始まりだな」と真面目な顔で言う。

皆の念力が届いたのか、本番の二十三日は絶好のお祭り日和になった。初めて日本人の手で発掘された貝塚として日本考古学の原点と言われている貝塚なのに、昔からの住人は関心が薄く、他所から移り住んだ人が大半を占めるというボランティア活動の厳しい現状。会員の減少を食い止め、ボランティア仲間の平均年齢が少しでも下がることを願って取り組む催し物が目白押しに並ぶ会場しかし、初めて縄文ムラまつりが行われた十四年前のあの熱気はもう戻ってこないのだろうか。他県の団体との交流も厚く、やる気満々だったボランティア仲間、あの頃は若かった!

人生下り坂になれば、月日ばかりが駆け足で過ぎて行く。このままでは駄目、もっとしっかり生

きなければ、と焦るばかりで時間に取り残されて行く不甲斐ない私。やっぱり認知症が始まったのかもしれない。「今まで過ごしてきた長い年月に比べるから、一日が短く感じられる」と誰かが言った。「少ない老い先を大切に生きたいと思うから一日が短いと思うのだ」と言う人もいる。人生締め括りの時を迎えても悟りには程遠い私のどたばたはまだ続きそうだ。

上天気に恵まれた陸平には老若男女の人々が一杯、たった一日だけの尻切れトンボに終わらないように、今少し老骨にムチ打つかと思えば、コンクール以案山子達が笑っていた。

今年の会報も本言の次で終わりとなる。一年の歩みは、いや走りは年々スピードを増してきているように感じるのは、矢張り歳の所為なのだろうか。今年がまだ終わつたわけではないが、当風の会や劇団ことは座には良い年であつたと思う。今年の総括は来月号に回したいが、何事も動きつづければ変化はやってこない。運は寝て待て、とは言つが、落語の枕にこんながある。「運は寝て待ててえ事を言いますが、あれは、運は練つて待てと言つんだぞですな」と。

兎に角ホッとしていないで、言ひなり、動くなりしなければ何も始まらない。(ひんち)

## 編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaize.com/>

ことば座 ギター文化館発「常世の国の恋物語百」第29話

う み げ ん ね  
「湖の弦音」

ことば座第21回定期公演 11月11日～13日（午後3時開演）

筑波嶺に逢はむといひし子は 誰が言聞けば神嶺あすばけむ

常陸国風土記にも記載され、万葉集にもその歌が載せられている筑波の燿歌。

産霊の霊力を高めるための宗教的行事であった燿歌をモチーフに、

『つくばねの峰より落つるみなのかほひぞつもりて淵となりぬる』の歌に唆されて、霞ヶ浦は三叉沖を男女の川(恋瀬川)と桜川が交わり深場となったことから恋が淵という、の他愛もない発想から万葉の若き男女の恋物語を創作。

大島直が演奏するクラシックギターをバックに、  
手話舞の小林幸枝が万葉の恋を舞う

脚本:演出:朗読・白井啓治 朗読舞・小林幸枝 ギター演奏・大島 直  
舞台背景画・兼平ちえこ 舞台装美・小林一男

入場料3000円（小中学生1800円）入場券はギター文化館にて取り扱っております。

ギター文化館 電話 0299-46-2457 Fax0299-46-2628

※11月12日、13日は14:00～14:30 ことば座朗読教室の発表会(入場無料)を行います。

朗読兼平良雄「平家物語(巻十一、第百三句) 讒言梶原」

ことば座 315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

☎ 0299-24-2063 Fax 0299-23-0150

## ギター文化館 2011 CONCERT SERIES

今年も残すところ僅かとなりました。来年はギター文化館  
創立20周年を迎える事となり、一層の充実を図ってまい  
ります。どうぞご期待ください。

11月23日(水) アンドレイ・パルフィノヴィッチ・ギター・リサイタル

11月27日(日) 木管トリオ・コンサート

12月4日(日) 角圭司ギター・リサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457 Fax 0299-46-2628

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で  
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、  
また大好きな雑木林に一滴みの土を分  
けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの  
風景」に唄ってみませんか。

オカリナの製作・オカリナ演奏に興味を  
お持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465

Tel0299-55-4411